

第9回 メーデー国際ブリガードに参加して 田仲泰子



筆者

キューバという国に偏見を持っていたわけではないが、日本から距離的に遠く、情報も十分にはないため、今回のブリガード参加は「無事に帰ってこられるだけでもいい」というのがホンネだった。行く前はすべてが不安で、神経質になるほど心配した。8人の共同部屋生活、水だけのシャワー、トイレ、早朝からの労働……。それが、着いたその日から不安もなく、嬉々としてキャンプ生活に溶け込めた。それは、ひとえに円卓会議の方々のアドバイスと励ましのお陰であり、大使館の田代明子さんから紹介していただいた友好協会の松竹照代さんが、絶え間なく届けてくださる連絡の数々のお陰であり、行きから帰りまでずっと一緒に行動して下さったお陰である。こうして楽しく始まったブリガード生活で、強く印象に残った出来事をいくつか報告したい。

1. 畑の労働

7時の朝のミーティング（朝礼？）でいくつかのグループに分けられ、今日の作業を告げられる。軍手、サングラス、スニーカー、帽子等の作業姿でトラック、トラクターの荷台に乗り、それぞれの畑・果樹園に出かける。私達韓国・日本チームはかなり遠くの畑へ。

途中、松竹さんが前回のブリガードで石拾いをした畑が、今年は何かが植えられているのを見て、「去年石だらけの土地が農作地になってる！ 石拾いもこうなるんならやりがいあるね」と言うのを聞きながら、朝の風を切ってトラックはサトウキビ畑を過ぎ、果樹園を通り抜け、広い畑に出た。日陰もないところなので、時々水を補給しながら約2時間石を拾った（写真下）。

2回目は、ビニールハウスの中の柑橘類の鉢の草取り、屋外でないのは有難かった。3回目は、イチゴ畑の草取り。隣のトマト畑で、鉄パイプをつないで水遣りをして



いた。作業は今日で終わりなので、みんな軍手やアームカバーを外し寄付した。泥だらけのまま渡したのに、とても喜んでくれた。

日本で言え



トラクターで畑へ出発！

ば「援農」活動。キューバの果物や作物が一面に育っているのを間近に見られたし、日本にいても土に触れる機会がない私には懐かしさを感じる作業で、行き帰りのトラックの荷台に詰め込まれて風を切って走るのも実に楽しい体験だった。

2. 病院・小学校訪問

カミロ・シエンフエゴ廟のカミロ（像）が見下ろすあたりに病院がある。その病院は地域診療所の上に位置し、地域診療所で扱いかねる状態の患者を受け入れる。さらにその病院でも無理な場合はハバナの病院へ送るとい、キューバの医療体制の説明があった。乳児の出産の状況、精神科の患者に対する対応等の説明の後、看護婦の労働条件、アルコール依存症に対する質問が出て、丁寧な回答があった。

詳しい内容は聞き取れなかったが、『Salud! 15号』に『キューバ医療の現場を見る』という本が紹介されていたので、ぜひ読んでみたいと思っている。

数日後、ハバナ市のお隣のアルテミサの小学校を訪問した。ダンスの先生がすばらしいモダンダンスを見せてくれた。小学校にプロフェッショナルなダンスの先生がいて、子どもたちに指導していることに驚いた。子どもたちも、衣装を着けて、男女組になって、いくつかのダンスを見せてくれた。「キューバは美しい国」と歌も歌ってくれた。

その後、教室をのぞいたら子供達が集まってきたので、一緒に写真に入ってもらった。そのうちの一人が紙に書いたものをくれた。

後でよく見ると、「大好きなお母さんへ、いつも愛してるよ」という言葉と絵が描いてあった。翌日が母の日だったので、学校でお母さんへの手紙を書いたようだ。お母さんには申し訳ない思いだった。

3. 圧巻は5月2日の国際会議

国際会議で日本の現状を訴える発言をしたのだ。福島原発事故とその後の政府の対応、沖縄の米軍基地、憲法第9条の危機的な状況について発言し、沖縄の基地建設に抗議するオバマ大統領へのハガキを掲げ、世界から



オバマ大統領へハガキを送る運動への協力を呼びかけた。友好協会の松竹さんが原稿を書き、希代さんがスペイン語に訳し、ハバナ在住の宮

本眞樹子さんが練習し、スペイン語で発言した。

日本からの発言は初めてということで、間際まで発言要請が通るか心配したが、内容がしっかり伝わり、会場は水を打ったように聞き入った。発言が終わると、各国の人たちがハガキと宮本さんとの連絡を求めて次々と寄ってきた(写真上)。キューバ放送局からもインタビューを申し込まれた。

今年は、日本の代表が参加していることを表す旗(友好協会の)も持っていったので、会場に大きく掲げられた。この旗は、キャンプの期間ずっと掲げられたし、メーデー会場でも大きく広げた。

4. 映画『標的の村』の上映

韓国のチームがチェジュ島の基地反対闘争を描いた映画を上映すると聞いて、早速松竹さんが交渉して同じ会場で、韓国映画に続いて、『標的の村』を上映することを了承してもらった。早速ポスターを作り、キャンプ内に貼り、宣伝した。私はキューバに来るまで、その映画のことを知らず、さらに高江にオスプレイ基地(オスプレイパッド)を作る計画も反対闘争も知らず、キューバで見ることになった。韓国の映画には英語字幕が付いていたが、日本の映画は日本語だけ。映像だけを見てくれる人がそれでも20人くらいいて、その人たちの思いに感謝だった。

そういった活動のお陰で、キャンプでもハガキを頼むことができた。日本はもっともって世界の場で発言すべきだと痛感した。同時に、そのための武器である旗、発言原稿、その翻訳文、スペイン語(または英語)、ハガキ、パフォーマンス(今回は漢字文化を紹介したが)……の用意があったことがこのことを実現したと思う。

ブリガーダには今回で3度目の参加になる松竹さんは、今までの経験を踏まえ、世界に向けた発言、旗、そして沖縄の映画を準備した。その松竹さんと心をつなげてスペイン語でスピーチし、オバマへハガキを送ろうと訴え、上映の際には弁士までつとめた宮本さん、このお二人と一緒に行動できた私は本当に幸せだった。

5. 個人的な感動

(1) ブエナビスタソーシャルクラブのライブ

オプションツアーのハバナカフェで、なんとあの夢に見たブエナビスタの現役メンバーのライブ演奏が聞けたのだ。チリチームが熱狂的に騒いでくれたお陰で、恥ずかしげもなく声援を送り、挙句、舞台上がって踊る

仲間に加わり、メンバーの間近に行けた!!! そして大勢にまぎれて、その陰で握手しハグしてきちゃった!

(2) 子供たちと日本語を学ぶ青年との交流

革命博物館見学で疲れてしまい、バスの出発まで2時間半ほど待たなくてはいけなかった。ちょうど木の陰の涼しげなところで、子供たちと先生らしき人が遊んでいた。楽しそうに遊ぶ様子を見ていたら、「どうぞ」と先生がベンチをさして座るように言ってくれた。

少したつと、「日本人ですか?」と日本語で聞かれたのでビックリしていると、すらりとした青年が話しかけてきた。ハバナ大学で2年間勉強したが、もっと勉強したくて一人で勉強している、日本人に会うと話ず練習をしている、とのこと。

確かに話し相手がいないと会話の勉強はできない。彼の今の職業、日本にいる友人、家族のこと、将来日本語通訳になりたい……等話しているうちにあつという間に2時間たってしまった。日本からは手紙が着くまで1か月くらいかかるというが、ハバナの住所を聞いて、日本語で手紙を送ることを約束した。

(3) キューバの医療を体験

滞在の後半、ひどい下痢に悩まされた。4日間の間、食事は1回、スープ1杯ほど、あとは食堂でお湯をもらって飲んでいった。大阪の仲間が先に帰るとき、薬を置いていってくれたが一向に効かなかった。キャンプのアジア担当の女性に症状を話し、ドクターに診てもらうことにした。塩分を含んだ粉末を1袋くれて、「常温の水を1リットル飲むこと、お湯はダメ、食事は普通に食べること」と言って、血圧を測り、口の中やら目を調べてくれた。ドクターの対応に信頼が持てたこともあり、粉末を溶かした水を少しずつ1リットル飲み、よく睡眠をとり、食事もして……そうしたらなんと、1日もたたずに治ってしまった。

あんなに何日も悩んだのに。以前から医者と患者の信頼関係は大事だと思っていたが、こんなに早く治るなんて! と我ながら驚いた。翌日あのドクターに会ったら「どう?」と声をかけてくれたので「もう元気です! 本当に有難う」とお礼を言えた。

帰国翌日から普通の生活(ボランティア活動、お稽古事等)にすぐ戻れ、もちろんおなかの具合も悪くなく、キューバがとても身近な、安心していける国ということを実感した。畑仕事もよかったし、掃除は丁寧だし、いつも陽気で、歌い踊り絵を描き楽しく暮らしている。「住宅が一番困っているかな」とハバナの青年が言っていたが、通訳になる夢はかなえる意気込みを持っている。

日本人がもっとキューバを知って、農家や職人、技術畑の人たちがその腕と資材をもって行って、キューバ産業に力を提供したら、きっとお互いにとってもいい関係ができるだろうな、と思う。

アレイダ・ゲバラさんの話を再びきく

星野弥生（スペイン語通訳・翻訳家）

日本に初めてアレイダさんを招聘する、という大事業を果たしてから6年。こちらが何もしないでも眼の前にアレイダさんが現れ
てくれる、というのはなんだか不思議な気がします。6月16日、文京区民センターでアレイダさんの講演会ならぬ、日本のキ
ューバの友人たちとの「懇談会」が開かれ、円卓メンバー5人が参加しました。

2日前の14日は父親であるゲバラの誕生日。生きていれば86歳。アレイダさんは、いつもの朗々とした声で、数字をあげて、
革命の起こった1959年と現在を比較し、キューバの人たちがどんなふうにいるかを語ります。



数字が物語る革命の成果

「1959年、人口500万人のうち40%は読み書きが
できなかったのが、現在、人口1150万人の識字率は
96%に。革命の時には全国に1つしかなかった医学部
は、現在は各州にあり、ハバナには4校もある。1959
年の医師の数は6286人、大部分が大都市に限られて
いて、革命後1年の間に50%がアメリカに渡ってしま
いましたが、現在は国民137人当たり1人の医師が
おり、99.9%が医療を受けられています。

革命は女性を尊重することを保証し、専門職の66%
が女性。59年には乳児死亡率が1000人あたり60人
だったのが、今日では4.2人。革命時60歳に届かな
かった寿命が、77.97歳になっています。『140歳まで
生きよう』というクラブだってあるのです。

予防接種は13の病気にわたり、すべて無料。以前
は科学の研究所は皆無でしたが、現在はとても活発に
研究がなされ、今後20年の間、アメリカの攻撃さえ
なければ最も先進的な場がキューバとなるでしょう」

そう、6年前もアレイダさんは同じように数字をた
くさんあげて説明してくれました。

連帯している国々に多数の医師を派遣

「革命で提案されたことは、科学的な人間、考える
人間、ということでしたが、そのことは片時も忘れら
れることなく、あのスペシャル・ピリオドの時にもそ
の成果はあらわれたのです」

小児科医であるアレイダさんのキューバの医療に
関する話はまだまだ続きます。

「ワクチンはどんどん開発されますが、一方でサト
ウキビ、アロエ、サソリなども用いる伝統医療、グリー
ン医療も重視されます。革命時には簡単な病気で多
くの人が死にましたが、現在の死因は富める国と同じ
です」

「1963年にはアルジェリアに医師を派遣し、2008
年までに13万4849人の医師が107の国に派遣され
ました。2010年には77カ国に37401人の医師が派
遣されましたが、ベネズエラには別に34000人が送ら
れています。ブラジルには14000人の派遣が考えられ
ています。キューバの医師が働く国々では大きな変化
がもたらされています。僻地が多いので、ただちに効果
が現れ、乳幼児の死亡率が減少し、健康状態が改善
されています。

2005年にカストロはヘンリー・リーブという、キ
ューバ独立戦争の時にキューバのために戦った米国の
医師の名をつけた緊急援助部隊を組織。その呼びかけ
に10000人の医師が応えました。キューバは、痛みや
苦しみ、死に対して闘い、死んではいけない人を死な
せない、治療できる病気は直すための備えをし、連帯
している国々に、いつでも連帯の手をさしのべる努力
をしています」

こどものいのちを脅かすアメリカの経済封鎖

そして話はアメリカの「犯罪的」な経済封鎖へ。

「封鎖によって、近くの国から買うことができない
ために遠くの国から買うことになる。その損失は2010
年3月から2012年4月までに1000万ドル。とくに
必需品の粉ミ

ルクはニュー
ジーランドな
ど地球の反対
側から買わな
くはならない
上、経済制
裁法により、
3~4倍も多
くの船賃を払
わなくてはな
りません。



筆者（左）の友人の息子（16歳）が、私の本
『父ゲバラとともに、勝利の日まで』を2度も
読んで、キューバ、ラテンアメリカに興味を
をもち、参加してくれた。次世代の有力な円
卓メンバー!?

キューバに寄港すると、6か月間はアメリカに寄港することができないことになっているのです。最悪なのは医薬品。アメリカの特許がある薬はキューバに売ろうとしないので、こどものいのちが失われる結果にもなります。封鎖はこどものいのちに影響します。だから私たちは封鎖に対して闘い続けています。国連総会では封鎖を非難する決議がだされるのに」

そして「希望」の話

「でもキューバは力強く、喜びを持って生きています。ラテンアメリカではベネズエラ、エクアドル、ボリビアなどの国々とALBA（米州ポリバル同盟…ポリバリアーナ※注の道）を創っているのです。キューバは孤立してはいません。ゲバラが夢見たように、アメリカ大陸全体がより正義にかなったつながりとなれば、と思います。

キューバの始めた言語のプログラムに「Yo si puedo（私はできるよ）」というのがありますが、単にスペイン語だけでなく、ケチュア語、アイマラ語など多くの先住民の言語の識字運動でもあります。ホセ・マルティが言ったように『騙されないよう、操られないよう、人民は教養を身につけてはじめて自由な人間となれる』のです」

気になるベネズエラの情勢にも触れました。

「3月にベネズエラに行って、医師の話の話を聞きました。本当に厳しく困難な状況です。ナチやファシストよりも酷い人たちの集団があつて、病院の前でゴミを燃やしたりしています。そういう人たちがアメリカに操られ、ベネズエラで混乱を引き起こしています。それがあたかも政府がやっているように報道されます。世界で起こっていることに警戒しなくてはなりません」

「世界的な不況の影響をキューバも受け、50万人の失業者を生み出さざるを得ない状況です。そんな不況の中、個人の責任で働く（自営）、という政策が打ち出されました。それにはリスクがあります。自分のお金を稼げば、社会主義社会に住んでいるということを忘れてしまうかもしれない、ということです。そこで創られたのが「協同組合」で、個人がつながり、必要性に応じて自分たちが作っていくという路線です。しかし決して無理やりではなくて」

「私たちに、ALBAがあり、CELAC(中南米カリブ諸国共同体。アメリカ、カナダを除外したアメリカ大陸の共同体)があります。これはリオ・ブラボールからパタゴニアにいたるまでの国々が社会的、経済的につながるためのものです。」

「ここで問いです。なぜアメリカが長年にわたって経済封鎖を行っているのか？ なぜ経済・軍事大国ア

メリカが小さな国キューバの変化に反応するのか？なぜ、5人の反テロリストを不当に制裁しているのか？ 答えは、キューバ革命がいまだに有効だからです。アメリカはキューバ革命を恐れています。フィデルが言うように『キューバは小さな国だけれど、やりたいと思ったらやれる、ということの世界に示すことができた』のです。他の国がキューバになったら、どんな世界になるでしょう。搾取をしている国にとっては大変なことになると思います。

社会が正義であれば、将来の世代にとって世界はよりよいものになります。人びとは生を全うし、生き延びる権利を持っています。しかし、そういう社会は空からは降ってきません。人民がつながりあつて、努力して初めて得られるものです。チェグが言うように、勝利の日まで闘い続ける、ということなのです」

いつもながらの、力強い「アスタ・ラ・ビクトリア・シエンプレ」(勝利の日まで)で終わったアレイダさんのトークでした。

※注「ポリバリアーナ」とは、スペイン領だった南米大陸のアンデス5か国を独立に導いた英雄シモン・ポリバルの思想を受け継ぐという意味。

アレイダさんの2008年の日本での講演については、『父ゲバラとともに、勝利の日までアレイダ・ゲバラの2週間』を読んでいただくと、詳しくわかります。

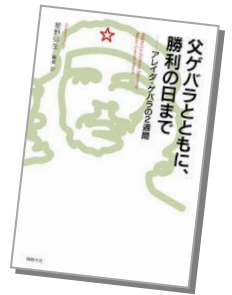
星野弥生 編・訳

同時代社 刊 (03-3261-3149)

E-mail: doujidai@doujidaisya.co.jp

1800円(税抜)

★同時代社に、「サルー！」16号を見たと言って、2014年7月末日までに注文された方に限り、1600円(税込・送料込)の特別価格で提供します。



ベネズエラのはなしをきこう！

こどもたちの共同体「ベンボスタ子ども共和国」を、ベネズエラで設立、運営しているマリア・レイサが日本にやってきます。石油の都市、マラカイボ近くの原住民の子どもたちに、住むところ、学ぶ場や食べる場を提供するために大奮闘しているマリア・レイサ。日本からも、「ベンボスタの友」のカンパが、建設の材料を買うために渡されています。来日を機に、ベネズエラでの子どもたちのようす、ベンボスタの活動について話をきき、併せてベネズエラがどんな状況になっているのか、聞きたいと思います。

日時 7月20日(日) 14時～17時

場所 世田谷ボランティアセンター(三軒茶屋駅下車 歩いて10分)
世田谷区下馬2-20-14

参加費 500円

連絡先 星野弥生(ベンボスタ子ども共和国駐日大使) 070-5554-8433

主催 ベンボスタ友の会 marzoh@gmail.com

共催 世田谷こどもいのちのネットワーク

日本・キューバ友好議員連盟主催/日本・キューバ友好400周年交流事業

全日空チャーター便でいく キューバ・ハバナ6日間の旅

10月1日～6日 申込締切り 7月31日

参加費 ビジネスクラス ¥840,000

エコノミークラス ¥227,000

問合せ 近畿日本ツーリスト ECC 第五営業支店 03-6891-9305
(担当 渡辺・玉木)

★入会(年会費3000円)・カンパ随時受付中★

※住所・氏名・電話・メールアドレスを明記の上、下記にご入金ください。

郵便振替 00100-9-499950 加入者名 キューバ友好円卓会議